論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（学術）	氏名	村尾　信義
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

診療時のイヌの福祉に配慮した保定方法に関する研究
-動物看護師の保定技術の向上を目指して-

論文審査担当者

主　　査	教　授	谷田　創
審査委員	教　授	都築　政起
審査委員	教　授	河合　幸一郎
審査委員	教　授	坂井　陽一
審査委員	准教授	黒川　勇三

〔論文審査の要旨〕

第Ⅰ章　序論

動物看護教育の始まりは1908年に英国に開校したCanine Nurses Instituteであるとされている。現在その英国では、動物看護師は国家資格となっており、専門職としての認識が高いが、わが国では未だ動物看護師資格の国家認定制度が整備されていないので、看護師は採血や注射の侵襲行為、投薬、X線撮影等の業務を行うことができない。わが国の動物看護師の地位向上を図るためには、資格認定制度の確立とともに、看護技術の向上を図るための研究が必要である。そこで本研究では、動物看護師の重要な業務の一つであるイヌの保定技術に着目し、適切な保定方法を明らかにするために、一連の研究を行った。

第Ⅱ章　動物看護師の日常業務における動物の保定技術に関する質問紙調査−保定時における動物看護師の安全対策について−

動物病院におけるイヌの保定方法の選択は看護師の裁量に任されているが、保定中に怪我をする看護師が多いと言われている。そこで本研究では、まず現場の看護師による保定の取り組み状況を調べることで、診療時における看護師の安全対策の一助とすることを目的とした。現場の動物看護師112名に対して保定技術に関する質問紙調査を行ったところ、回答者の79.8%が1日に10回以上の保定に携わっており、また94.0%が直近1年間に動物の保定でなんらかの怪我をしていたことが明らかとなった。

第Ⅲ章　動物看護師によるスワブを用いた小型犬の唾液採取方法

近年、唾液中のコルチゾール値からイヌのストレスを評価する技術が開発されたことから、今後は動物病院で本技術を利用したイヌの健康診断が増加すると予測される。しかし、わが国における飼育率が最も高い小型犬から唾液を採取する技術はいまだ確立していない。そこで本研究では、スワブを用いて小型犬に過大なストレスをかけずに、分析に必要な唾液量を採取する方法について検証した。その結果、全供試犬からコルチゾール濃度の測定に必要な唾液量をストレスの負荷なく採取することが可能であった。さらに採取者と

保定者の主観的評価からもイヌに過度な苦痛を与える兆候は認められなかった。

第Ⅳ章　３種類の診療時における動物看護師によるイヌの保定方法

診療時に用いる保定方法によってはイヌにストレスをかけてしまう可能性がある。そこで本研究では、イヌに対する３種類の診療に対して、それぞれ３種類の保定方法を用いた時の、イヌの体温、心拍数、行動、唾液中コルチゾール濃度の変化を比較することで、適切な保定方法を明らかにすることを目的とした。保定前後におけるイヌの体温、心拍数、唾液中コルチゾール濃度の変化の測定、イヌの行動（転位行動などの発現状況）を観察することで、イヌへのストレス負荷のレベルを保定方法間で比較した。その結果、3 年以上の実務経験を有する看護師であれば、いずれの保定方法を用いてもイヌに大きなストレスがかかることはなかったが、「心電図診療」の「保定に要した総時間」については保定方法間に有意差が認められたことから、診療と保定の効率を考えると、保定方法を選択することには意味があると考えられる。

第Ⅴ章　臨床経験に乏しい動物看護師のためのイヌの横臥位保定方法

イヌの心電図の検査における保定は、経験の浅い看護師が担う業務の一つであるが、診察台で立位から右横臥位に寝かせる技術が必要となる。そこで本研究では、保定経験に乏しい動物看護学生を対象として、「従来保定法」と、本研究者が開発した「代替保定法」を体験させ、イヌの安全性の確保とストレスの軽減について比較することを目的とした。その結果、「従来保定法」は「代替保定法」と比べて、保定前後でイヌの「生理指標」（心拍数と体温）が有意に上昇し、またイヌの転位行動の出現頻度が有意に高かった。さらに、「従来保定法」の方が「保定に要した時間」が有意に長かったことから、経験の浅い看護師が、イヌを立位から右横臥位に寝かせる場合は、「代替保定法」を用いた方が簡単で、またイヌに与えるストレスも低いことが示唆された。

第Ⅵ章　総括

一連の研究の結果、ヒトと動物の双方の観点から、動物の保定の重要性が明らかとなった。今後は本研究成果を基に、動物看護系大学等の教育機関において、動物の保定に関する教育プログラムを展開し、学生の技術と経験に応じて、異なる保定方法を段階的に習得させることが重要であることが示唆された。さらに本研究成果は、経験の乏しい動物看護師が容易にかつ安全（ヒトと動物の双方にとって）に保定できる技術の開発に直結するものである。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。